

Chiorin!

http://jeso.jp/

第12号 (2014年4月)



代表4選手を決定

第8回国際地学オリンピックスペイン大会



本選成績優秀者の記念撮影 (3月25日、茨城県つくば市つくばエキスポセンターにて)

地学オリンピック日本委員会は4月9日、第8回国際地学オリンピックの代表派遣選手4名を発表した。派遣選手に選ばれたのは、宇野慎介、杉昌樹 (いずれも灘高3年)、西山学 (巣鴨高3年)、野村建斗 (筑波大附属駒場高3年)。

派遣選手は、昨年12月15日に全国68会場で実施された予選、この3月23日から25日に実施された本選、引き続き25・26両日に実施された代表選抜を

経て選ばれた。

このほか、次点として加茂朗 (静岡県立磐田南高3年)、辻有恒 (灘高2年)の2名が、また国際大会特別派遣生徒として三重県でトップの成績を収めた芝田力 (高田高2年) が選ばれた。国際大会特別派遣生徒は、国際大会のメダルを争わないが、ゲスト生徒として国際地学オリンピックに派遣され競技等に参加する予定。(敬称略)

日本委員会、認定NPO法人に

地学オリンピック日本委員会は3月11日、認定特定非営利活動法人 (認定NPO法人) に仮認定された。

認定特定非営利活動法人は、税制上の優遇措置を受けることができ、寄付をした法人や個人は税金の還付などを受けられるようになる。

久田健一郎理事長 (筑波大学) は「2016年に開催される日本大会に向けて、財政基盤を大きくかつ安定的にすることが課題となっている。日本委員会がこのタイミングで認定されたことは非常に大きい」と話している。

過去最高の予選参加者数

昨年12月15日に実施された予選の申込者数は1689名。実際に参加した生徒は1462名で、昨年の812名を大幅に上回り史上最高となった。

参加生徒の内訳を見ると、男子は1072名、女子は390名であった。学年別では高1が653名、高2が626名で全体の87%を占めた。都道府県別では埼玉県が381名で最高、以下東京が283名、千葉県が204名であった。一方、参加がなかった県が8つ、試験会場が設けられなかった県が1つあった。



国際大会の会場は宮殿

今年開催される第8回国際地学オリンピック大会がスペインの北部の港町サンタンデルで9月22日から29日に開催されることが、4月10日、正式に発表された。前号では、今年の開催国が米国と伝えしたが、受け入れ先の都合でキャンセルとなり、代替開催場所の調整が行われていた。

会場となるのは、ラ・マグダレーナ宮殿。王室が滞在できるように地元住民の寄付によって建設が始まり、1912年に竣工した。現在は会議場として用いられている。

サンタンデルの近郊には、旧石器時代の遺跡として有名な世界遺産「アルタミラ洞窟壁画」がある。

【今号の誌面】日本代表の抱負 (2面)。予選参加者の横顔・2016年日本大会の概要 (3面)。三重大会組織委員長あいさつ・特別派遣生徒の抱負・リレーエッセイ (4面)。

代表選手、抱負を語る

メダル奪取を誓う、頼もしい勇者達！



日本代表が決まった4選手（筑波研修センターにて3月26日撮影）

金メダルを狙っていきます

こうして日本代表に選ばれた以上は、国際大会での金メダル獲得を狙っていく所存です。世界中の精鋭が集う国際大会で金メダルをとるためには、地学の各分野ともそれなりの力をつける必要があります。特に実技試験においては、知識と思考力のみならず実物にどれだけ接してきたかという経験も問われます。私の場合は、天文分野が得意な反面、地質分野の理解が十分に及んでいないところが課題で、本選の標本鑑定試験では苦労しました。これからもっと実物の鉱物や岩石、化石に接する経験を積み、地質への理解を深めて試験に臨もうと思います。その他気象、海洋、天文の分野でも慢心することなく、さらに高いところを目指す気持ちで勉強を続けていきます。

宇野慎介
(灘高等学校3年)

最高を目指す気持ちは強いです

地学オリンピックにはそれ以降ももちろん参加、今回を含め3回連続で優秀賞を受賞しました。3回連続というのは、日本代表になかなかなれなかったということです。中3の時は初めて受けた面接で何を答えればよいかわからず失敗、

次の年には本格的な英語による最終選抜試験が新たに行われ、英語で意見を述べるなど1度もしたことのなかった私は当然ほぼ何も言えずで、また失敗。そして今回、英語試験対策を重視し、本選・最終選抜に挑みました。最後の最後に日本代表選手として国際大会へ参加できるようになったのが、最大の喜びです。国際大会で取りたいもの、狙いはもちろん金メダルです。今まで長期間努力してなんとか実現した国際大会への参加。その分、最高を目指す気持ちは強いです。そのほか、気象・海洋部門1位も狙いたいところです。

杉 昌樹
(灘高等学校3年)

恩返しとなるような大会にしたい

高1の時に将来は宇宙開発もしくは地球惑星物理学に関する研究をしたいと思い、地学担当の先生に相談したところ勧められたのが地学オリンピックでしたが、本選で敗退してしまいました。本選では、同じように地学に興味のある人たちから刺激を受け、友達で地学に興味がある人が少ない分とても楽しかったのですが、表彰式で壇上に上がっている人たちを見ると、自分も壇上に上がりたいと

いう気持ちがありました。その分、今年表彰式で名前を呼ばれた時の喜びは格別なものでした。

こうして日本代表になった今、世界大会に出るからには目指すは金メダル。それを達成するには、自分には課題がたくさんあります。特に代表選抜で浮き彫りになった英語力不足を夏までに何とかして、海外の参加者と円滑なコミュニケーションをとれるようにしたいです。自分の人生の糧になり、一生の宝にできるような、また、先生をはじめ支えて下さった方々への恩返しとなるような、そんな大会にしたいと考えています。

西山 学
(巣鴨高等学校3年)

今からとてもわくわくしています

初めて地学オリンピックを受けたのは中学3年生の時でした。以来毎年予選を受け、今回初めて本選に参加することが出来ました。僕の学校にはなかなか地学好きの友人はいないので、本選に参加して地学が好きな皆さんとご一緒させていただいたことは、とても新鮮で貴重な経験だったと思います。また、つくばにある様々な研究施設を見学させていただきましたが、個人では出来ないことなので、そこでも地学オリンピック本選に参加できてよかったですと感じました。

本選の前に3回ほど参加させていただいた秋田大学の地学セミナーも貴重な経験でした。僕は今まであまり本物の岩石や鉱物に触れたことがなかったので、岩石標本の鑑定をさせて頂けたことは特に印象深い出来事でした。国際地学オリンピックの本物の問題を演習として解いたり、英語の地学用語について聞いたのも今回の代表選考、また国際大会で役に立つと思います。

今回、国際地学オリンピックはスペインのサンタンデルで開かれるのですが、スペインは今までに行ったことの無い国ということもあり、今からとてもワクワクしています。

野村建斗
(筑波大附属駒場高等学校3年)

予選に参加した生徒達の横顔

幅広い興味や希望進学先をもつ地学オリンピック参加者たち

過去最高の1462名が参加した日本地学オリンピック予選(国際大会一次選抜)では参加の理由や参加者の進路希望などを探るためのアンケートが実施され、参加者の99%にあたる1449名から回答があった。アンケートの質問は多岐にわたるが、ここではその一部を紹介、分析を加えてみたい(すべて複数回答)。

先生の影響が大きい

地学オリンピックに参加した理由は、先生に勧められたからが3割近くで一番多く、授業の一環として参加したという回答もほぼ同じ程度見られた。面白そうだから、地学が好きだからという理由もそれなりに多いが、中学や高校の先生方が物心両面で参加をサポートしてくれることが、参加を決意する重要な後押しになっていると考えられ、先生方の存在は大きいと言える。

Q1 地学オリンピックに参加した理由

参加の理由	回答数	割合
先生に勧められたから	433	29.9
授業の一貫で参加することになった	423	29.2
面白そうだから	368	25.4
地学が好きだから	322	22.2
地学部として参加することになった	260	17.9
自分の力を試したかったから	229	15.8
進学に役立ちそうだから	92	6.3
国際地学オリンピックに参加できるから	78	5.4
その他	78	5.4
友人に勧められたから	69	4.8
地学が得意だから	64	4.4
家族に勧められたから	21	1.4



留学生との交流をする本選参加者

進学先は文系も多い

地学オリンピックがほかの科学オリンピックと異なるのは、法学部など文科系の学部に進学を希望する生徒も参加をしている点であろう。理学系を希望する生徒のなかでも地学を専攻しようと決めているのは必ずしも多くない。

Q2 希望する大学での専攻

専攻	回答数	割合
法・経・文学系	412	28.4
理学系(地学以外)	376	25.9
理学系(地学)	202	13.9
工学系	196	13.5
教育系	165	11.4
医歯薬看護系	134	9.2
農学・水産系	50	3.5
情報系	43	3.0
未定	163	11.2
その他	72	5.0

将来は研究者志向

地学オリンピック参加者は傾向がはっきりしているのは、大学や公的機関、企

業の研究者となりたいと考えている生徒が多い点である。地学オリンピックに参加したことを糧に、頑張っ

Q3 将来つきたい職業

将来の職業	回答数	割合
大学・公的機関の研究者	278	19.2
公官庁の公務員	222	15.3
企業の研究者	203	14.0
医療関係	157	10.8
会社員	156	10.8
中・高の理科・数学教員	104	7.2
小学校の教員	58	4.0
自営業	38	2.6
その他	184	12.7
わからない	397	27.4
無回答	3	0.2



代表選抜で英語討論をする生徒達

日本大会の概要固まる

2016年8月に三重県、寄付金の募集始まる

日本で開催される第10回国際地学オリンピックの概要が、このほど地学オリンピック日本委員会から発表された。発表によると、大会の会期は2016年8月20日から28日の9日間。大会の略称は「IESO 2016 三重」。会場は三重大学を主会場とする三重県内。参加国・地域数は不透明な要素が大きい

が、40程度が想定されている。メダルを争う筆記試験と実技試験は23・24両日にわたって実施されるが、試験の前には伊賀上野や伊勢志摩への訪問、試験後には熊野での国際協力野外調査などを予定。参加者が三重県の豊かな自然や文化を体感できるようなプログラムがこれから計画される。

三重県の鈴木英敬知事は、4月9日

の定例記者会見で大会の要項を発表。県内マスコミがニュースで取り上げた。

寄付金も募集中

地学オリンピック日本委員会では、日本大会を開催するための寄付を募集している。寄付をした法人、個人は、ともに税制上の優遇措置を受けることが出来る。寄付をしたい場合は、名前・住所・連絡先を地学オリンピック日本委員会まで申し出て、寄付金の振込をする。入金を確認されると後日、寄付金受領証明書が届く。地学オリンピック日本委員会の連絡先と口座番号は次の通り。

Eメール; esolympiad@yahoo.co.jp、振込先口座「みずほ銀行本郷支店 普通2786070 国際地学オリンピック日本大会」。

平 朝彦（海洋研究開発機構理事長）

画家ゴーギャンは、「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」という大作を描いています。この絵から何を感じ、何を読み取るのか、は個々によって異なると思いますが、その問いかけは普遍的なものであり、人間の発する最も根源的なものです。宇宙の起源や法則を探求し、地球と生命の進化を調べ、そして、私たちの生きる世界そのものを理解しようとする、すなわち地学の目標は、ゴーギャンの問いかけと一致しているのです。

地学オリンピックは、高校生・中学生が国際的な舞台で、自分たちの地学の力量を試し、また世界の仲間と交流し、まさにゴーギャンの問いかけを熱く語り合う貴重な体験の場を提供します。日本列島は、地球の営みの最も活発な地域に位置しており、自然災害の常襲地帯でもあります。日本での地学オリンピックの開催は、東日本大震災の経験も含めて、世界の青少年に地球と人間の関係について感じ、考えてもらう良い機会となります。次世代の成長と育成のために、日本がなし得る極めて重要なイベントになると考えております。

芝田 力（国際大会特別派遣生徒）

予選を通過し、本選の対策をしていたころ、僕のもとに地学オリンピック日本委員会から一通のメールが届きました。それは、2016年開催地である三重県から一人、スペインである国際大会にゲスト生徒として参加することになっていて、あなたがその候補者ですという内容でした。僕はその内容を承諾しました。貴重な経験だと思ったからです。国際大会では、ゲスト生徒は表彰の対象にはなりません、すべての行事に参加できるので、僕にできる限りのことをしようと考えています。またITFI（国際協力野外調査）などの国際交流の場では、積極的に発言して、コミュニケーションを図ろうと思います。このような貴重な経験をさせていただけることに感謝し、そのためには惜しみない努力をしようと思います。

本選や最終選抜では、数多くの貴重な経験をさせていただきました。地学の知識を持ったほかの参加者との会話は、普段の友達とはあまりできないものなので楽しかったです。

ほかの選手と肩を並べられるような英語力、コミュニケーション力をつけて、スペインでの様々な行事を悔いなく行えるようにしたいです。

.....
Chiorin! リレーエッセイ no. 12

この星で幸せに暮らすための地球科学

中川 和之



阪神間で育った私は、ボーイスカウトのハイキングやキャンプで、しばしば六甲山を訪れた。自宅から931メートルの最高峰やキャンプ場に歩いて行き、小さいころは浜での水練学校にビーチサンダルで通った。海と山が間近に迫っているのはなぜ、なんて考えもしないで、都会に間近な自然の恩恵を受けていた。

よく通ったハイキングコースが、ロックガーデンから芦屋カントリーを抜けて最高峰に行くルートだ。最もしんどいのは、住吉川の谷筋から400メートル近くを一気に登る七曲がり。621メートルの雨ヶ峠の先から最高峰が目の前に見えるのに、住吉川の谷まで60メートル降りないと七曲がりに行けない。小さいころは「登るのになぜ降りるのか。ロープウェイでもあったらいいのに」と思ったりした。その谷筋が、「五助橋断層」だっ

たと知ったのは、1995年1月17日の兵庫県南部地震の後だった。

大陸で活動していた火山のマグマだまりが、地下で固まって花崗岩となり、日本海拡大で日本列島の基礎となった。4枚のプレートが押し合い、ひび割れだらけの列島で繰り返す断層運動が、100万年で約1000メートル、花崗岩の塊を持ち上げ、六甲山となった。断層の一つに沿って岩が崩れ、住吉川の谷筋を作ったのだ。子供の頃からの五助橋のナゾは解けたのだが、六甲山を高くする地震が今後も繰り返す証拠のようで複雑な思いもした。

地震や火山噴火、洪水や土砂災害でできあがった日本列島に住む子供たちに、目の前の風景の成り立ちと自然災害との関わりを知って欲しいと、日本地震学会など3学会で地震火山こどもサマースクールを始めて15年になる。そこで「地

球科学とは、この星で幸せに暮らすために、とても大切な学問だと分かりました」と発表してくれた中学生がいた。地学を学ぶ若者には、地球のなぞ解きの面白さだけでなく、その向こうに地球と直結する人々の幸せな暮らしを意識し続けて欲しいと願っている。

.....
なかがわかずゆき。時事通信社解説委員。科学記者として地震や火山、災害対応を学び、出身地での阪神大震災をきっかけに市民の立場からの災害対策を模索、中央防災会議専門委員などを歴任。日本地震学会で災害と自然の恵みを次世代に伝える活動を続け、日本ジオパーク委員会にも参画。

NPO 法人地学オリンピック日本委員会
ニュースレター Chiorin! (no. 12)
平成 26 年 4 月 25 日発行
発行人：NPO 法人地学オリンピック日本委員会広報部会
編集長：萬年一剛（広報副主査・神奈川県温泉地学研）
〒113-0032
東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル 3F
印刷所：あしがら印刷